

## 離島，種子島における過疎とその背景

——鹿児島県熊毛郡中種子町を事例に——

茂野 睦美

都市への人口集中の続くなか、地方における人口減少と、その現象に伴う経済・社会的影響が問題とされて久しい。このいわゆる「過疎」の進む地域として、第一次産業、特に農業を主とした農山村や平地の都市部から地理的隔絶性をもった山間地域などが一般的に挙げられる。しかし、海によって本土と隔てられ、全国に338を数える「離島」もまた、1960年代に始まる急激な人口減少、高齢化、産業衰退という過疎問題をかかえる地域である。

本論文で取り上げる鹿児島県種子島も、紛れもない過疎地である。しかし種子島は、藩制時代からの独自の産業・社会構造をもち、550年間それを保持してきた島であった。また、本土との隔絶性はあるものの人口と面積をもち、資本主義経済の侵入した現在においても自主性・自立性を発揮しうる立場におかれた、孤立大型離島なのである。

そこで本論文では、「過疎地」としての種子島をみるとともに、種子島という「離島」における過疎をみることを目的としている。

調査対象地域は、南北に細長くのびる種子島の中央部、中種子町である。北に位置する西之表市が島の中心地、南に接する南種子町が宇宙ロケットとリゾートの町とすると、中種子町はサトウキビ・甘藷を中心とした、まさに農業の町である。産業別就業者数の約半数が第一次産業に従事していることになり、畜産との複合経営や輸送園芸などにも力を入れている。しかし2万を越えていた人口は昭和36年を境に激減し、今では1万人余りとなっている。年齢別人口構成をみると、10代後半から20代前半が極端に少なく、新規学卒者の就職・進学による島外流出がその大きな要因である。人口減少率は緩やかになりつつあるが、若年層の

薄さ、高齢化、脱農家が進んでいる。

このような中種子町を、経済的側面と人口移動、そして集落社会に焦点をあて、その特徴と現状をみた。

そこには、社会の動きに左右されながらも常に新しい方向性を探り、町を支えてきた、土台としての農業があった。昨今の厳しい農業情勢のなか、その専門的色彩の濃い農業が過疎化を促しているといえるが、過疎問題としてよく取り沙汰されるほど深刻な産業衰退がみられるわけではない。それにもかかわらず、人口減少のとどまらない理由には、「離島」であるという条件も大きくかかわっていると思われる。すなわち、海を隔てているという隔離性が、兼業機会に乏しい離島からの人口流出を促し、また孤立性からくる生活上の不便さは、住民の本土に対する離島の意識を強めているのである。

また種子島には、離島であるからこそその構造を保持してきたともいえる、マキを中心とした在来集落と、他の離島などから生活の場を求めてきた移住集落とがある。その、血縁的・地縁的關係の濃淡、つまり共同体的色彩の濃淡が、人口流出とその形態に差をもたらしてきたこともうかがえた。

以上のことから、離島としての種子島における急激な人口流出と現在も続く過疎化の背景がみえてきた。その根底には、島という環境のなかで形成された社会への資本主義経済の侵入があった。しかし広い耕地面積が農業就業人口の保持しうること、挙家離村型から世帯分離型の離村形態に移行していることなどから、今後、種子島の過疎の在り方は、その形を変えてゆくのではないかと思われる。